

もくじ

特集 この街で笑顔で生きる 認知症 3

新型コロナウイルスワクチン接種のお知らせ 6

くらしの窓 7

健康・福祉 11

子育て 16

スポーツ 18

芸術・文化 19

情報アラカルト 24

相談 30

市長表敬訪問

全国大会出場おめでとう!



リポタンカップ第50回日本リトルシニア日本選手権大会 (8月2~7日=東京都明治神宮野球場ほか) 尾道リトルシニア野球協会



第49回全日本中学校陸上競技選手権大会 (男子走幅跳) (8月18~21日=福島県とうほう・みんなのスタジアム) 高橋 然さん (高西中学校)

第7回全日本中学女子軟式野球大会

(8月18~24日=京都府) 豊岡 陽莉さん (美木中学校) 岡田 愛結さん (美木中学校)



令和4年度全日本弓道選手権大会 第55回全日本女子弓道選手権大会 (10月2日=三重県伊勢市) 岡本 紀代さん

人の動き [8月30日現在] ※ () 内は前月比。

64,165世帯 (-79)

人口 男性 63,230人 (-85)

女性 67,408人 (-109)

計 130,638人 (-194)

<p>市内の交通事故 [8月30日現在]</p> <p>令和4年広島県 交通安全年間スローガン ゆるさない ハンドル・スマホの二刀流</p> <p>件数 153件 (+33)</p> <p>負傷者 146人 (+47)</p> <p>死者 1人 (-5)</p> <p>※ () 内は前年比。</p>	<p>今月の納期限 9/30(金)</p> <p>固定資産税・都市計画税③</p> <p>国民健康保険料③</p> <p>介護保険料③</p> <p>後期高齢者医療保険料③</p>
--	---

今月の表紙



8月18日、「吉和太鼓おどり」の浄土寺奉納が4年振りに行われました。保存会の役員や吉和小・中学校の子ども達ら約40人が参加し、鉦・太鼓に合わせ踊りを奉納しました。浄土寺参道の階段を登る際には、敵を警戒するためと言われる、後ろ向きで登る姿を見せました。

尾道市役所 0848-38-9111	百島支所 0848-73-2701
因島総合支所 0845-22-1311	浦崎支所 0848-73-2001
御調支所 0848-76-2111	消防局 0848-55-9120
向島支所 0848-44-0110	尾道市立市民病院 0848-47-1155
瀬戸田支所 0845-27-2211	公立みつぎ総合病院 0848-76-1111

トピックス—Topics—

自転車に関する要望活動で、首相官邸を訪問

7月28日(木)、全国約400の自治体で構成される「自転車を活用したまちづくりを推進する全国市区町村長の会」の活動の一環で、岸田内閣総理大臣へ自転車を活用したまちづくりに関する要望書を提出しました。

要望活動では、しまなみ海道オリジナルのサイクルジャージやサコッシュなどを総理に渡し、尾道市のサイクリングへの取り組みに関するPRも行いました。



■ 広報おのみち9月号に掲載の行事については、新型コロナウイルス感染症拡大の状況により、縮小・中止の可能性があります。事前に主催者にお問い合わせの上、ご参加ください。

この街で 笑顔で生きる 認知症

認知症高齢者の数は、2025年には65歳以上の約5人に1人に達することが見込まれています。今回の特集では、9月のアルツハイマー月間にあわせて、認知症の家族の介護をされている人のお話や、認知症になっても安心して暮らせるまにするための取り組みをご紹介します。

☎ 高齢者福祉課 (☎0848-38-9137)

インタビュー INTERVIEW

認知症と診断された妻の介護を6年間続けながら、認知症の人や家族を支援する「歌声カフェ」を自宅で開いている、村上 奨さん (84歳=因島重井町) にお話を伺いました。



村上 奨さん 妻・君子さん

突然だった、妻・君子さんの認知症の発症

長年、夫婦で贈答品・衣料品を扱う自営業を営んでいた村上さんご夫婦。君子さんが75歳のとき、坐骨神経痛のため病院で診察を受けた際に、看護師から「奥さんの言動がおかしい」と指摘され、念のため病院で検査を受けたところ、医師から「アルツハイマーです」と告げられました。その際、奨さんから見た君子さんには、おかしい点は思い当たらず、現役で仕事をしていたこともあり、まさに青天のへきれきでした。

それから君子さんの症状が進んで行きますが、奨さんは君子さんの症状がなかなか受け入れられなかったそうです。人には知られたくないと思い、君子さんのすることを訂正したり怒ったりして、自分なりに何とか治そうとしていました。

そんな時、認知症に関する講演会や、「認知症サポーター養成講座」等に参加して、病気を正しく理解することができました。また、「在宅介護者の集い」にも参加し、同じ立場の人と出会ったことで、自分自身が変わらないといけないという気持ちになったそうです。

認知症の本人に寄り添う場、認知症カフェを設立

当初、「君子さんが自分の症状について不安に思っている気持ちに十分に寄り添うことができず、また、認知症を知識や情報として捉えてしまった」と反省し

ているという奨さん。

仲間と集い、認知症の本人に寄り添うことができる場を作ることで、かつての自分と同じような立場の人の助けになりたいと、2020年10月、自宅で、認知症カフェ「歌声カフェ」を設立しました。運営は、専門知識を持つスタッフのほか、君子さんも“できること”は一緒にしています。



「歌声カフェ」では、最初みんなで合唱し、リラックスした雰囲気になります。▶

毎月1回のペースで開催しており、前半に合唱をした後、後半は認知症支援の知識や体験を持つスタッフが、マンツーマンで認知症の本人や家族から話を聞いています。「本人の話をしっかり傾聴して、帰り際に“心がすっきりしたね”と思ってもらえたら嬉しい」と奨さんはカフェへの熱い思いを語っていました。



介護生活を振り返って

現在、村上さん夫妻は娘さんと3人で暮らしています。君子さんの認知症がわかった後、家族は認知症の特性を学びました。介護生活を送るうちに、家族にも心構えができ、“できること”“できないこと”があることが自然だと思えるようになったそうです。タオルをたたんだり食器を出したりといった“できること”は、君子さんの毎日の役目です。

これまでを振り返り、奨さんは「初めは葛藤もありましたが、妻の介護を通して、私自身も心の持ちようが変わり、人生が充実して拓けてくる感覚があります」と話していました。